

①中学生・高校生の部 最優秀賞

受賞者名： 田代一裕 様

能楽の革新

今日、グローバリゼーションが広がるにつれ、世界中でますます日本文化が知られ、実践されている。しかしながら、能楽、歌舞伎、そして私が3歳から続けている日本舞踊などの伝統芸能は、他の日本文化と同じレベルまで国際的に普及しているとはいえない。これに1つ理由を挙げるとすれば、「柔軟性」であるといえる。実際、他国で普及している相撲、柔道、酒、緑茶などは、今や日本人だけの文化ではなく、各国で着実に適応し変化し続けている。能楽を国際化するためには、日本の民俗文化(伝統とは異なる)が、日本の占有物であるという考え方からどこまで抜け出せるかが鍵になると私は考える。言い換えれば、ある事象から基本概念のみを抽出し、新しいパラダイムで再解釈し再構成することである。古典と言われる日本のエンターテイメントには、「伝統」と「風化した殻(形骸)」が一緒に含まれている。そこから殻を壊し、伝統だけを抽出し、他のパラダイムに入れ、それを再構築することが重要だ。保守的な人々の中には、「伝統を変えることは絶対に許されない」と言う人もいるが、伝統の本質は殻を壊しエッセンスを抽出することによってのみ際立つ。それが「伝統を守る」ということである。私は、能楽の革新を、上演、舞台、教育の三つの観点から考えたいと思う。

第一に、異なる文化との融合を行うことは、能の国際化に大きく貢献する。例えば、今年の6月、宝生和英氏(※)が54年ぶりに、キリスト教をテーマにした能「復活のキリスト」をバチカンのカンチェッレリア宮殿で上演した。これは大変革新的な試みであり、伝統的な舞台芸術に携わる人々には、このように時代に沿った上演方法を開拓していくことが必要だ。中には、「曲に他の宗教を取り入れるなど、能の神髄を損なう」と批判する人もいるかもしれない。しかし、能は本質的には柔軟性に富んだ伝統芸能であり、宗教という垣根を超えた相互理解を生む可能性を持っている。それ故、私はこうした試みが多様性への理解を人々にもたらすと考えている。

二つ目として、能舞台の既存概念を破ることにより、能はより柔軟性に富み、国内、国外を問わず人々が接しやすくなる。例えば、京都の瓜生山の頂上には屋外に能舞台があり、舞台には四隅に柱が立っているだけの作りとなっている。つまり、この舞台は能舞台の純粋な要素だけを抽出することにより、本質を際立たせているのだ。同様に考えれば、能はどこでも上演可能であり、極端に言えば街中でも上演できるものである。能楽堂の慣習を強調し、維持すべきだという人もいるだろう。それもまた一つの真実だが、新しい環境における新しい方法での上演は、一般の人にとって能を親しみやすいものとし、観賞の機会を増やすことに繋がる。

三つ目として、能の更なる発展には、人的資源のスキルと、テクノロジーのスキルの両方が必要だ。日本の伝統芸能を国際化するためには、他国の言語に精通しているだけでなく、内外の文化を深く理解し、同時に新たなアイデアを生み出すことのできる多くの人材が必要である。つまり、優れた演者だけでは発展は不可能なのだ。時代に適応するためには、革新を起こし、新しい伝統を創造する必要がある。例を挙げると、歌舞伎座では、テクノロジーを取り入れて多言語解説を提供することで、何千もの外国人が観賞し、理解し、楽しむことができるようになった。このように技術の進歩を取り入れることで、能の伝統を維持し分かち合うことができるだろう。

結論として、外国文化との融合、能舞台の定義の再考、そして人材教育は、能の国際化に多いに貢献できると思われる。能は 700 年もの間、伝承を軸に凍結保存されてきたことで、歌舞伎のような再解釈は容易ではなく国際化には強い決意が必要だ。能が変革に向けてオープンソースのソフトウェアのように世界に開放されるのであれば、この革命に参加を希望する革新的な芸術家が現れるだろう。私は伝統と伝承は異なるものだと信じている。伝承は単なる殻、形骸であり、変わることはない。真の意味での伝統とは、適応し変化に耐えうる本質のことである。能楽は私たちの伝承ではなく、驚くべき伝統であると認識しなければならない。

※宝生和英氏：シテ方宝生流二十世宗家